成人向
獸華
繚乱

獣華
繚乱

獣華繚乱

んぅ……
ぬちゅ
くちゅ
ぬちゅ
ひぁっ
ひぁっ
ひぃんっ
マコトの……声？
でも……何か……
マ……マコトッ
何を……一体どうして
だがッ
ふん……まぁまぁだな
あひぃん♥
ふ……ふこッ♥弄っちゃあ……♥
コレ……どうかな？
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ギリッ
キュッ
ニュプッ
ボイッ

うおおおッ

乳圧が……くぅッ

ひゃひいッ♥

乳首そんなにクリクリしちゃッ♥

だッ

あへッ

んひぃ

なんて暴力的な乳マンコだッ

搾り取られちまうッッ

射精すぞオおおおッ

んぁ♥
ビクッ
ビクッ
ビクッ
はぁ♥
はぁっ
ぶるっ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
……ったく
情けねェなァ
この程度で
気ィ失いやがって
ぶるっ
ビクッ
マ……
マコトッ!?

どうやらお目覚めのようだな

…下衆な真似を

嫌われたモンだねェ あのマコトって嬢ちゃんは自発的にシてるんだぜ？

な…ッ

ぐぐっ

マコトがそんな事……自分から望んでするワケ……ッ

オイオイ 持ちかけたのは あの嬢ちゃんだぜェ？

「アタシがノエルの代わりになる」ってなァ

ったく 泣かせる話だねェ

そう……

私達は行方不明のノエルの足跡を追ってこのアジトに……

……

ノエル……

ノエルを人質に取られて……

それから……

……りました

ぐっ

俺達はどっちでもいいんだぜェ？マコトちゃんのムチムチ爆乳もたまんねェしなァ

ニヤ

ニヤ

わかりましたッ私を代わりに好きにしてくださいッッ

へへ……商談成立……だな

へへ……この巨乳に背中横乳丸出しとは……
それじゃ……
タマんねェなァオイ
ご開帳とイクかッ
ぷるん♥
ぷるん

うおおおッッ

……ッ

こりゃすげェッ
もしかして
マコト以上の超爆乳
じゃねェのかッ!?

それじゃあ
早速……

ぷるっ

ムニュン

ひぁあッ

ぷるっ

ぷるんっ

しかし
スゲェな

こんだけデカいと
牛だか人間だか
ワカりゃしねェな

ひはぁッ
そんなに強くぅ♥

ヒクンッ

グニュッ

モミ

お?
感じてんのか?

グニュッ

ムニュ

大方　統制機構でも
乳オナホに
されてたんだろ?

ひいんッ
……お？
おいおい乳首が勃起してんぞ
言葉責めだけで感じるたァ大したマゾ牝だぜ
ぷくぅ
ぷくんっ
ち……違ッ
だめェ……こんなにされたらッ
ムニュッ
おっぱい切なくなっちゃうからァ♥
ムニュン
なのに……感じちゃって……るなんて……エ♥
やだ……ッ無理やりこんなコトされて……
んんっ

ひ……っ、これ……この子……
すごく……巧い……ッ
まぁ
なんだァ？乳首転がされるだけでもうメロメロか
上司に開発されてたってのはあながち冗談でもなさそうだ
これ以上されたら……私……もう……♥
馬鹿なこと……をぉ私……は　感じて……なんてエッ
ちゅぱっ
ちゅるるるっ
それなら……コイツでどうだい？
ひぃぃぃんッ
ぱくッ
カリッ
コリッ
ぷるんっ
ぷるっ
ぷるんっ

今……
イきやがったな？
……まぁいいさ

そっちばっかり
気持ちよくなってる
のも　不公平だろォ？

俺も気持ちいい目
させてもらわ
ないとなァ

な　何言っ……
私……イって
なんか……ッ

それじゃ　相手
してもらうぜェ

や……ッ
本当に……
これ以上……ッ

そのご立派な
爆乳マンコ
でなァッ

ひゃひぃ
いれ♥

らめぇッ
今すごく……おっぱい敏感になってるのにィ♥
おぉ……スゲェ乳圧だタマんねェ
やだ……コレすごく硬くて……熱い♥
ホラほさっとしてねェで
ひぃん
口も使うんだよッ
ほごおおおおッ!?

ほご……ッ

お……ぐうぅッ

仲間の名前を出したら急に素直になってきたなァ……くうううッ

コレが……ノエルとマコトの……味♥

たぷん

へへ……喜べよこいつはさっきまでノエルとマコトを犯してたんだぜェ

どうだ？美味いか？

ぷる

ぷるん

ひぁあ♥

たぷんっ

クリッ

しょこぉッらめらのぉ♥

エロい顔しやがって……爆乳犯されてそんなに嬉しいかァッ

たぷん

はひッ♥はひいッ♥

レロ

レロ

レロ

乳オナホ犯されて嬉しいツバキはドM変態爆乳奴隷なんでぇす♥

オラッイくぞォッ

ヌプッ

ヌプッ

ヌプン

……い
ペチ
ペチ
おい
おいッ
さっさと起きなッ
ぺチッ
ん……
ふぁ……
休んでないで
続きだ　どんどん
ヤらねェとお仲間が
どうなっても
知らねェぜェ
二人には絶対……
手を出さないでッ
わ……
わかってるよッ
……いいから
はやく始めようぜ♥
ぬるっ
ぬるん
とろ
ククク……
チンポまみれに
なって喜んどいて
随分なタイド
じゃねェか
後　つかえて
るんでしょ？

それじゃ遠慮なく……
レロ
レロ
レロ
へへッ
仲間のタメとか言いながら
ビクン
ぬぅぅぉ
ひゃうぅッ
ぇ……こはァ♥
お前がチンポ欲しいだけじゃねェのかァ？
ち……違ァ♥
こんなスケベなニオイ振り撒いてるお前が悪いんだぜェ
ぱふぱふ
クリ
クリ
クリ
はぁあ……ッソコぉッ♥
感じすぎちゃうのォ♥

へへッ
もっと気持ちよくしてやるぜェ
……
お前の大好きなコイツでなァ
チンポ……またァ
くふぅッタマんねェなァ
何度挟んでもこの最高だぜェ乳マンコはよォ
ひぁあッ♥
うぅ……ッスゲェ乳圧だァッ
チンポ……熱いよォッ♥
そんなにチンポ……ゴリゴリ……されたらァ♥
あひィ♥

オラッ
ぐっ
自分で動くんだよッ きっちり締め付けなァッ
ほ……ぉッ いい具合だぜェ
極上の乳オナホってトコだなァ
チンポでおっぱいズボズボ犯されて……
はぁッ
この極上オナホ乳犯してるとマンコに突っ込むのも馬鹿らしくなっちまうぜェ
ぶるるふぅ
くぅッ
たまらんッ
なのに……おっぱいすごく熱いぉオ♥

ビクッ
お前も結構ノッてきたじゃねぇか
クリッ
ひゃふぅ♥
なんで……こんなに
はぁ
はぁッ
無理やりされてまた……ッ感じちゃう……なんて……エ♥
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ホライッちまいなッ
パイズリだけでマン汁噴き出しちまいなァッ
ぶるるっ
ぶるっ
ビクッ
ビクビクッ
イく
アッ
アッ
おっぱいだけでイかされる変態になっちゃふぅう♥

んほおおおッ♥
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ぶるっ
ふぁあ……♥ こんなにおっぱいばっかり射精されたら……
おっぱいで妊娠しちゃうよぉ……♥
ぶるっ
トロッ
ったく派手にアクメ晒しやがってダラしねェなァ
けー
けー
んじゃ そろそろあちらさん共々本番とイクかねぇ
トロッ
ぶるっ
はッ
はッ
はッ
ビクッ
ビクッ
トロッ

ひぁぁぁぁぁん♥
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ドピュルッ
ふぁぁぁ♥
どろっ
おちんぽ臭いィ♥
臭くてトロトロで
……美味しいのぉ♥
ちゅぱ
ほぁ……
ちゅぱっ
せーえきまだ
残ってるぅ♥

ふぁひぃ♥ おっぱいがァ♥

トロけちゃうのォ♥ ドM乳オナホのツバキはぁ♥

おチンポ様に乳肉奉仕するだけでまたイかされちゃいますぅ♥

はぁ……おチンポ♥

おいひぃよぉ♥

ふぇ……？ ……あ

ツ ツバキ!?

アンタ達……ッ

私以外には手を出さないって約束は……ッ

ん～？ ヤクソクなんてしたかァ？

まァ約束を破ったとしても 何度もアクメったその身体じゃ手も出ねェだろ

……ッ

はぁ……♥

マコト……ぉ♥

ツバキッ
そんな奴らの
言いなりになんて
……ふむう!?
チュッ♥

むぅー
私……気が付いちゃったの♥
私は……おチンポ様にご奉仕するための肉便器なんだっこ♥
何……コレ……ツバキのキス……スゴく上手くて……イヤらしい……
私まで……引っ張られちゃ……♥
好きよ ママトお♥
だから……ね? 大好きな貴女と……私と一緒に
おチンポ専用の乳オナホにい♥
ッ……バキい♥
うん♥ 私も一緒……だ……よ♥

いい心がけだ
それじゃ大好きなチンポに奉仕させてやる
あ……♥
おち……んぽぉ♥
ホラ……マコトも、ね♥
う……ん♥
おほぉこいつァいいぜ
牝牛二匹のエロ爆乳ズリを眺められるとはなァッ
うぅん……チンポ汁ぅ♥
美味しい先走りが溢れちゃってるぅ♥
マコト……そんなにがっついたら
おチンポ様に失礼……でしょ♥
はぅん♥
……おいおいお前一人だけズリぃぞ？
こっちも混ぜてくれよォ

ふぁあ……♥
おチンポが……
たくさぁん♥
へへへ……
こっちにも
挿入れて
やんねェとなァ
チンポが欲しい
欲しいって
ヒクヒクしてやがる
やぁん♥
ツバキのぐちょぐちょ
エロマンコに
おチンポ挿入れられ
ちゃうのぉ♥
だ ダメッ
そ……そっちは……
ふぇ……？
感じ……すぎちゃ♥
ほぉお
おおおん♥

おひりッ♥
おひりにィ♥
チンポ奥まで
ズッポリきて
まぁぅう♥
はひッ♥
ぞうれすぅ♥
ツバキは
ウンチ穴弄って
オナりまくってた
変態れすぅ♥
なんだァ？
アッサリ奥まで
挿入っちまったぞ？
ケツの穴で
一人遊びでも
してたんだろォ？

ツバキ……
すごく気持ち
良さそう……
あんなので
ゴリゴリされたら……
アタシも……♥
じゅん
お前もチンポが
欲しくて仕方ない
みたいだな
心配するなよ
特大のをズッポシ
くれてやるぜ
お前の出番だ

ちょ……何　それッ
そんなの挿入れ
られたら……ッ

死んじゃッ

ま……待ッ

そんなの……
や……

ヘヘヘ
こいつぁ獣人ってより
ケダモノに近ェんだ

お前が孕むまで
チンポ抜いちゃ
くれねェぜ？

かはッ
……ひゃめッ

しきゅ……
つぶれちゃッ♥

ぷるん、

これじゃホントに……
肉オナホだよォ♥
ひいんッ♥
チンポまた膨らんでるッ♥
子宮無理やりこじ開けられてるよぉ♥
はんぐーー
ぷるん、

ほぉッ
ほぉお♥
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ぱっ
31
へへッ
あひッ♥
ぷるっ
ぷるっ
はげッ♥
はげし♥
向こうもいい具合
じゃあねェか
そらッ
こっちも
イくぞォッ
はっ♥
ビクッ
はひィ♥

んおおお
おおお♥

ビクッ
ビクッ
ビクン
ドプン
ボッ

ほぉおお♥
ビュクッ
ビュルッ

こんなに
注がれたらァ♥
ゴプッ
ゴポッ
ドピュッ

大好きなマコトちゃん
にも分けてやんなァッ
クソ穴タンクに詰まった
クソザーメンをなァ

くぽぉ
ぬぽぉ

お腹パンク
しちゃうぅ♥

ひぁあん♥

ちゅぱッ ホジ
ホジ
ぱぁッ
ごめんね マコト……♥
マコトの口にクソ穴排泄ザーメンブリブリ出しちゃうのぉ……♥
マッ……マコトぉッ そんなに舌でホジホジしたら……はひぃ♥
ビクッ
ビクッ
ごちゃ……ごちゃうぅ♥
ホントにぃ♥
ばるふ

ツバキ……マコトぉ♥

二人だけおチンポ貰えるなんてズルぅい♥

ここ こんなに垂れちゃってるよぉ……♥

ノエルぅうッ そこ……舐めちゃ……ァ♥

はぁ……ノエルぅ♥

んんぅ

ああん ノエルぅ♥

そこ……ナメたらァ♥

ホラ 大好きなチンポだ

ふぁはあ♥

乳首が擦れるぅ♥

お前らのエロ爆乳で挟むんだよぉ

んーッ♥

くぅぅぅぅぅッ

射精るぞおおッ

ビュクッ

ドプッ

おひい……深いィ♥

ふぅん♥

ふぁお♥

チンポ……♥

多すぎィ♥

はひぃ♥

ソコ……すごいれす♥

ったくチョレぇモンだなぁ

統制機構ってのもこの程度か

クックック……

はぁ

はぁ

はぁ

まだまだ楽しませて貰うぜェ

ここまで本編をお読みくださり有難うございます。

ここからはゲスト様の作品になります。

ゲスト様の作品をどうぞお楽しみくださいませ。

～悦螺の天へ誘えど～

雄と雌の粘膜が擦れ合う音と、生々しい肉の淫臭。それに混じって微かに漂う香りが、意識を、理性を酩酊と惑わせる。

焚かれている香の成分を、当然のようにマコトは聞かされてはいない。

ただ、何かしら媚薬的な、催淫効果のあるものなのは明白だった。

「はぁああっ♥　あっ、あっ、いいっ、くふぁああああっ♥」

やや陽に焼けた豊艶な肢体が、快感に打ち震えながら跳ねた。陽光の下でならばさぞ健康的に映るだろう肌は淫猥にくすみ、イヤらしくぬめっている。

「ひぁあああんっ♥」

嬌声とともに飛び散ったのは、汗の飛沫と涙、唾液。それにマコト自身の愛液と……全身に隈無く付着した精液の一部だ。どれだけ全身を震わせ肌から弾け飛ばそうとも、自ら分泌する量もさることながらブチまけられ付着する量が尋常でないため肌を汚す淫汁は増え続ける一方だった。

「はうっ、おっ……おおおお♥　はげっ、激し……すぎ……ひぅううっ♥　そ、そんなに、突かれたら……おっ、お腹の、ナカ……ぁ♥　……ひっ、……ひっくり返っちゃう、からぁ」

「ククッ。君は本当に感度が良いな、ナナヤ少尉。この乱れっぷり……純血の人間とは比較にならん」

結合はしたまま、騎乗位をとっていたマコトの身体をグルリと反転させ、やや腰を浮かせて後背位へと移行しつつ男はそう言って嘲った。

「まさに獣！　獣臭いケツを派手に振って、淫獣だな君は！」

「ふっ、あっ、あンンッ♥」

あからさまな侮蔑を含んだ言葉。それでもマコトはさして気にする風でもなく無心に快感を貪った。今さら、気にするだけ無駄というものだ。

それがどのような管理社会、統治機構の中であれ、人は異端を見れば差別し、嘲弄し、排斥しようと試みる。例え現行世界を絶対的な力で統べる統制機構に所属していたところで、それは変わらない。むしろ純然な〝人間〟では無い獣人たるマコトは組織の性質からしてそもそもが相容れぬ存在であり、さらに士官学校時代からその卓越した肉体能力、近接戦闘能力を常にやっかまれ続けてきた彼女にとって今置かれている境遇は前向きな諦観、彼女なりの処世術の結果だった。

「ンッ♥　あっ、……やっ、はぁ……そ、そこ、ダメ……ヒャンッ♥　ま、弱いからぁ……お尻い、……し、尻尾の付け根、撫でられると……ふぁああああああああ～～～～～～～～～～ッ♥」

屈辱は感じる。

一人の女をよってたかって取り囲み、乱暴し、凌辱するこの行為は、正義を謳う統制機構軍内において本来ならば重罪だ。重罪だが、今マコトの尻尾を弄び、荒々しく子宮口にまで剛直を突き込んでいる男が彼女の直属の上司であるという事実関係を鑑みれば、下っ端の獣人娘が多少騒いでみせたところで何がどう変わるということも無いだろう。それよりもマコトが怖れるのは、この事を知った親友達が義憤に駆られ、淫辱の渦中へと飛び込んでくることだった。

誰よりも何よりも大切な親友達を巻き込まないためになら、どれだけ己が身を汚されようとも笑って耐える、それが……マコト＝ナナヤという少女だった。

それに、考えようによっては便利な面もあるのだ。

「あっ、あンッ♥　はひいいいいっ♥　尻尾お、尻尾モフモフしながら突かっ、突かないで……かっ、感じすぎ……やはぁっ♥　おっ、おチンポ、グリグリって、お（その裏……ンぁあああっ!?」

「感じすぎだぞ、ナナヤ少尉。イヤらしい娘は好きだが、こうも堪え性の無い淫乱では些か興が削がれてしまう」

（よく、言うよ……こんなにチンポ膨らませて。……ンッ♥　でも、ホント……この人のって、大っきくて硬いから……そこだけは、スキ……かな♥）

積極的に腰を振るマコトの貌は確かに雌のもので、そこには嫌悪や諦観以外に自ら望んで愉しもうとする思惑もはっきりと透けて見えた。多分に女としての演技を含みつつも、今はひたすら没頭していたい――上司が諜報部員としてもっと有能な人間だったなら、そんなマコトの心底に潜むものに気付くことも出来たかも知れないが、幸か不幸か彼は適度に無能な人間だった。

（どうせならもっと激しいと嬉しいんだけど……仕方ない、か。……こうなったら、アタシの方から……ンッ♥）

乱暴に突いてくる上司の動きに自分から同調し、パンパンという腰と尻肉の打ち合う音が間隔を狭めていく。ようやく望む快感を得られたことで絶頂が近いことを自覚しつつ、マコトは膣壁を刮ぐ肉棒へと意識を集中させた。

「えぐれっ、えぐれてるアタシのオマンコッ♥　極太チンポでえぐられちゃってるうはひいい〜〜〜〜ンッ♥」
「グ！　こ、このスケベ穴、マンコ肉がウネウネと締めつけてくるぞ……た、たまらん！　これ以上は……んくっ、おおおおっ!!」
「はんおおおおッ♥　ソコッ、やっ、イッちゃう、アタシ、も、もお……ひぅあぁあああああイッちゃうよおおおおおおっ♥」
膣内で膨張しきった肉棒が一気に弾けるのと、マコトの意識が白く弾けたのとは殆ど同時にだった。
（……あぁっ、精液……ドクドクって、流れ込んでくる……でも、ちょっと水っぽいかなぁ……う、ンッ）
「おっ、おおおお……搾り摂られる……っ」
「ン……ふぅ……はぁ♥」
やや物足りなくはあったがそれでも絶頂は絶頂だ。悲鳴に近い声を漏らす上司からありったけの精液を吸引し、マコトはうっとりと溜息を吐いた。
「く、あぁ……な、なんてエロ穴だ……死ぬまで吸われるかと思ったよ」
ようやく解放され、上辺だけの余裕を取り繕った上司に作り笑いで答えつつ、マコトは順番待ちしていた同僚達の股間を目聡く見やった。
（……数だけは多いけど、なんだかなぁ。どうせなら、もーちょっと満足度の高いヒトに犯されたいんだけど……贅沢も言えないか）
つい今し方絶頂を味わい、散々吸精したはずにも関わらず、マコトの汗まみれの肌は紅潮し、肉襞はヒクヒクと卑猥な蠢動を見せていた。
（早くチンポ突っ込んでもらって……こ、この疼き……ふ、くっ！　……止めてもらわないと……♥）
獣人種であるマコトには、年に何度か発情期が訪れる。
こればかりは種族的な性質である以上どうしようもないし、無理に抗えば心身に変調をきたしてしまいかねない。特定の恋人でもいればとも思うが、どうやら人並外れて発情時の性欲が旺盛らしい自分の相手を務められる相手となると、かなり難しいようなのだ。
その点、謂れ無い差別の結果とは言えこうしていれば幾らでも男の側からマコトの身体にむしゃぶりつき、一日中どころか何日でも好きなだけ犯し続けてくれる。彼らはマコトを薄汚い低俗な獣人種だと馬鹿にし、一方的に凌辱しているつもりでいるのだろうが、マコトに言わせてみればお互い様もいいところなのだ。
（アタシはアタシで……利用、させてもらうもん……ねっ♥）
溜まりに溜まった性欲の発露。
いったん開き直ってさえしまえば、割り切るのは思ったよりも楽だった。
どれだけ非道な行為、差別意識があったとしても、精神的に優位性を保つことさえ出来れば耐えられるものなのだ。
世界虚空情報統制機構諜報部特殊慰安奉仕課所属性処理爆乳便器少尉。主な役職は爆乳膣を用いた雄汁便所――そんな巫山戯た肩書きも、愉快とさえ感じる。
だからマコトは妖艶に微笑む。
ゆったりとした仕草で唇を舐め回し、精液にまみれた乳房を揉みしだいて雄を挑発する。
「他のみんなも……早く、ね？　シよ？」
雄叫びをあげて殺到してくる男達を俯瞰しながら、マコトは自分よりもよほど獣らしい彼らを気取られぬように嘲笑した。

■■■

「うっ、おおっ！」
「でっ、射精るっ!!」
「くふぁあああああああっ♥」
既にどれだけ注がれたものか。
前後の穴で同時に果てた同僚達の精を貪欲に吸いながら、マコトはまだ止みそうにない甘く狂おしい疼きに眉を顰めた。
「……うっ、はぁ……もっと、……ねえ、もっかい、シようよお……ンッ♥」
たった今吐精したばかりの男達にそう誘いかけるも、流石に限界なのか彼らは荒く息を吐くばかりでまともな反応すら返ってこない。
「うわっ……ちょっとヤリ過ぎちゃったかなぁ……？」
見渡せば周囲は死屍累々、惨憺たる有様だった。
入れ替わり立ち替わりマコトを犯し続けていた同僚達だったが、途中で緊急の任務の

ため半数くらい抜けてしまったのがいけなかった。いつもは全員が精根尽き果てるまでし続けてようやくなところを、その半分程度ではマコトを満足させるなど到底無茶な話だ。

「……はぁ。ヤラしい匂い……すごい、充満してる……」

立ち籠める淫臭が強すぎて、折角の香ももはや殆ど意味を為していないように思える。もっとも、マコトにとっては香のもたらす催淫効果などあくまで最初のとっかかり程度のもので、むしろ性欲を促進させる意味合いでは男達にこそ必要なものだったのだからこうなってしまっては特に気にもならなかった。

今は交わり合った淫臭こそが、旺盛な肉欲を掻き立てる。

「はぅ……ッ！　ん、きゅふ……あぁ……♥」

火照りが、冷めない。

一度灯ってしまった発情の火はまだマコトの中で煌々と輝き、激しく燃え続けていた。その熱が内側から身体を焦がす。

(ダメ……まだ、全然足りない……よぉ……♥)

「ふぅ、ふ……あっ、ン……や、だぁ……もっと、もっと欲しい……おちんちん、欲しいのにぃ……きゃうっ、うぅう」

かろうじて最低限の理性は残しているつもりでも、発情が強まればどうしても獣性の方が大きく表層に出てきてしまう。疼きを止め、渇きを癒したくて、マコトはまだ余力のある肉棒を求め視線を彷徨わせた。

「無い……おちんちん、元気なちんぽぉ……無いよぉ……このままじゃ、アタマ……おかしくなりそ……ふぅ、はぁっ、あぁ……」

手近に転がっていた同僚の萎えきってしまった陰茎を握り、何度か扱いてみても呻き声が聞こえるだけでまるで勃起してはくれなかった。さらに何人か同じように試してみても結果は変わらない。

(ダメ……アソコ、お腹の奥、ジンジンして……こんな中途半端なのじゃ、生殺しだってば……もっと凄いの、こんなヘニャチンじゃなくて、子宮の奥まで一気に満たしてハメ殺してくれるようなの、デカチンポ、欲しいのに……)

「やだぁ……ちんぽ、ちんぽおおちんぽぉ……、勃起ちんぽハメてよぉ。アタシのオマンコ、チンポ穴好きにしていいからぁ……おっぱいでも、クチでも、ケツ穴でも、ブチ込んでよ、ねぇ……」

セックス依存の中毒患者のように四つん這いで室内を回りながら、マコトの潤んだ瞳はふと、部屋の入口で立ち尽くしている小さな影を認めた。

「……あっ、あの……」

「……？　キミ……確か……」

少年。

歳の頃は十代も前半、かつて後輩だったカルル＝クローバーと同じくらいだろうか。おそらく正規の軍人らしからぬ見た目ではあるものの、マコトは彼の幼げな容貌に見覚えがあった。担当こそ異なるものの、つい半月程前から諜報部に配属された新人のはずだ。

特筆すべきは、

(そっか、このコ……アタシと同じ)

少年が獣人種であること。

耳や尾の形から察するに犬型だろうか。それも大型犬ではなく小型の、コーギー犬か何かの血が強いようだ。やや大きめの狐に似た耳や尻尾をフルフルと震わせて、縮こまってしまっている。

この惨状に完全に気圧されてしまっているのだろう。

(……あー。そう言えばこのコ、参加してるの見たことないもんなぁ)

諜報部の殆どの男性と交わったはずの記憶を探ってみても、彼の姿はついぞ見た覚えが無かった。年少の新人、そして獣人であるという差別から除け者にされていただろう事は想像に難くない。

「え、っとぉ……どう、したの？」

湧き上がる性欲を抑えつけながら、マコトはなんとか自然体を装って少年に問いかけた。もっとも、半裸で全身精液まみれという様相では自然もへったくれも無いものではあったが。

「そ、その……ちゅ、中佐！　中佐を、探していたん、ですけど……」

余程動揺しているらしく、慌てふためきながらそう言った少年にぎこちなく微笑みかけ、任務で途中抜けした中佐が確か彼の直属の上司だったのを思い出したマコトはそれを伝えてやった。

「中佐なら、緊急の任務で出ちゃったはずだけど」

「えっ!?」

どうやらまったくの知らされていなかったらしい。どうせ部隊の中で彼にだけ任務の詳細等を伝えもせず適当に放置して今のように走り回らせているのだろう。悪質なやり口だが、獣人相手にはそう珍しくもない。

「そ、そんな……うぅ、どうしよう……この報告書、今日までって言われてたのに……」
手にしたファイルに視線を落とし今にも泣き出しそうな顔はやや高めな声や柔らかな仕草と相まってまるで女の子のように可愛らしい。
(あっ……や、やだっ……ン♥)
抑えていたモノが、急に込み上げてきた。
「は、あ……ふ、ひぅ……クッ、……あぁ♥」
「あ、あの……ナナヤ、少尉？」
向こうは自分のことを知っているらしいことを『まぁ、それもそうか』と苦笑しつつマコトは痴態を覆い隠そうと両腕で自分の身体を抱きしめた。
「よ、用が……済んだなら……イッ♥　……は、やく……行った、方が……いい、よ？
……はっ、ぁ……ん、むぅ～～～～～～……ッ♥」
年少ではあるが、男――しかもあんな愛玩的な仕草をとられてしまっては、反応せずにいられる方がおかしい。それでもマコトが少年に手を出すことを躊躇し自制しようとしたのは、同じく獣人として差別を受けている彼への同情めいた感情がこの磨れきった境遇に引きずり込むのをよしとしなかっただけだ。
「ね？　……はや、く……ぅ、はぁあっ♥」
「ナッ、ナナヤ少尉!?　大丈夫ですか!?」
「だっ、ダメ！　……はっ、ひゃうッ♥」
駆け寄ってこようとする少年を手で制しつつ、マコトは肥大化する生々しい獣欲を懸命に抑えつけようとした。
率先して自分を犯し、慰み者にしようとしてくる連中相手にはこちらからも性欲処理のために利用してやろうという意思が働いたが、彼は違う。心配げにマコトの様子を覗っている少年は無垢で、純粋で、それは汚してはならないもののように思われたのだ。
「ア、タシは……大丈夫、だから……っ！　……だからキミは、早く……ね？　あっ♥
ぁ……戻った、方が……戻って……ひぃっ、くふぅッ」
「少尉！」
ついに堪えきれなくなり、その場に倒れ込みそうになったマコトを少年の細腕が寸でのところで抱きかかえていた。
(あ、……わぁ、アタシの腕より、細いや……モジモジしちゃって、なんだかホント、子犬みたい……)
「少尉、その……やっぱり、こんな、事……その、ちゃんと上層部に、報告して、何とかして貰った方が……」
少年はどうやらマコトが散々嬲り者にされた結果体調の不良を訴えているものと勘違いしているようで、必死に顔を背け見ないようにしながらボソボソとそんなことを口走った。
「う、うん……ま、まぁ、アタシのことは……ホント、……大丈夫だから、ね？」
頬を赤らめ俯いている少年にドギマギしながら、マコトは高鳴る鼓動を彼に気付かれぬよう深呼吸をした。
――それが、いけなかった。
(……ふ、ぁ♥　……オトコノコの、ニオイ……このコの、アタシに興奮してるニオイが……胸、いっぱいに……ひゃん～～～～～～～っ♥)
「ふにゃぁあああああああッ♥」
全身を雷に打たれたかのように、少年の腕の中でマコトの身体が激しく痙攣し、跳ねた。その後も小刻みに全身を震わせながら、気怠げに息を吐く。
(ウ、ウソ……アタシ今、軽くだけど、……イッちゃった？)
限界まで昂ぶった性欲を無理に抑えつけた反動か、少年の青臭い匂いを嗅いだだけで達してしまった自分に戸惑いながらも、マコトはワケがわからないでいる彼の幼げな顔からもう目を逸らすことが出来なくなっていた。
「ナナヤ少尉……その……ンッ!?」
まったく唐突に。
「はむっ♥　ん、チュッ……ん、むぅ……ふぶっ、ちゅちゅ、レロ……んぅ、むぅぅぅ……ふぁ……んちゅ、じゅる、ちゅぶっ♥　……ふむぅ、はぁ♥　……レロレロ、ちゅぱ、ちゅる……あふっ♥」
マコトは、少年の唇を奪っていた。
まず間違いなく誰も触れたことなど無いであろう、ファーストキス。少年の目は驚きに見開かれ、一方マコトの目はトロンと官能に弛みきっている。
(……あちゃー。ダメ……ヤッちゃった。でも、もぉ、我慢なんて……無理だよ……このコ、可愛すぎるもん……あぁ♥)
「んむぅ、ふぅぅぅっ♥　チュッ♥　チュチュッ、レロレロ……じゅるる、ちゅむぶ、ふぅ♥
ふむぅぅぅっ♥」
唇を舐め上げ、そこから呆然と開かれた口内へと舌先を侵入させたマコトは熟練の技でもって少年の舌を絡め取り、ねぶり回した。

（キス……だけで、スゴク……キモチ良いなぁ……はぁ♥）
まだ事態を呑み込めていないのだろう。為すがままにされている少年の早鐘のような鼓動をもっと強く感じたくて、マコトは彼の制服のボタンに手をかけた。
「……ふ、むぅ……ん、……ひゃむっ、……ぅ、うぅ……っ!?」
ボタンを外され、制服を半脱ぎ状態にされてシャツの中をまさぐられるに至りようやく少年は現状を認識しだしたのか、咄嗟にマコトから身を離そうと藻掻いた。しかしか弱い少年が少しばかり抵抗したところで鍛え抜かれたマコトの身体を引き剥がすことなど出来ようはずもない。
「あぁっ♥　……はぁ。……キミ、女の子みたい、だと思った……けど……、ん、こうして、胸とか触ってみると……やっぱり、オトコノコだねぇ……」
「あっ、ナ、ナナヤ少尉……やっ、だ、だめ……ですぅ」
（怯えちゃってる……ああ、目尻に涙溜めちゃって、可愛いなぁ）
「ひゃぁあんっ!?」
マコトの指で胸板を撫で回され、さらには軽く乳首を抓まれて少年は悲鳴をあげた。その反応がさらにマコトを加速させ、後戻り出来なくさせていく。
「クスッ♥　オトコノコなのに、乳首弄られて感じちゃってるんだ……アハ、なんか硬くなってきた……フ、ツフ……」
「やっ、やめっ……ナナヤ少尉、こんなコト、ダメです……よぉ」
蚊の鳴くような拒否の声など聞くにも値しないとばかりにマコトは少年の乳首をコリコリと弄びながら、唇だけでなく瞼や頬にまでキスの雨を降らせた。
「チュッ♥　ちゅぷっ、チュチュッ……ふむ、んちゅぅ……ぷぁ♥」
（キスって、こんなエッチだったんだ……アタシ、知らなかった……）
「あっ、あぁ……しょう、いい……」
次第に少年の貌も酩酊したかのように蕩けてくる。香にあてられたか、それとも室内に充満するまぐわいの淫臭によってか。マコトとしてはそのどちらでも構いはしない。
「スンッ、スン……ああ、キミ、イイニオイする……」
（小さくても、獣人らしい……やっぱり人間の男の人とは違う……この匂い、凄い、スキ……うん。アタシ、コレ大好きだ……）
思い返してみれば、これまでずっと人間の男性にばかり抱かれてきたため獣人同士でいたそうとするのはマコトも初めてのことだった。
そのせいか、匂いも、味も、どちらも新鮮で……下腹の疼きがいつもの発情時のものより強烈になっている気がした。
「少尉……少尉い……」
譫言のように呟く少年の唇にもう一度口付けてマコトは胸をまさぐっていた手をそのまま彼のお腹、さらにその下にまでゆっくりと這わせていった。
「怖くなんて、ないから……ダイジョーブ……任せて……」
（うわぁ、なんかアタシ、いつもよりすっごいエッチになってる気がする……なんでだろ。ドキドキして……今……すごく、濡れてる……）
太股を伝い落ちていく淫蜜の感触に我ながら驚きつつ、マコトは少年の下腹部に手をやって――
「え、……あ……うっ、う、……ぇ……？」
――一瞬、思考が完全に停止した。
（な……に？　……今の……）
触れた。
触れて、撫でた。
触れて、撫でて、ズボンの上から……握った。
「こ、れ……キミの……」
ビクビクと脈打っているソレがなんであるか、わかっているのに脳が認識を拒否したのだ。マコトが知る常識からはあまりにかけ離れすぎていて、容易に認めるわけにはいかなかった。
「あっ、……う！　少尉い……ソコ、は……あっ」
「ウソ……だよね？　だって、こんな……あ、あはは……っ」
思わず乾いた笑いを浮かべながら、マコトは指先でファスナーを探り当てると躊躇いがちにそれを引き下ろした。
「あうっ！　ダメ……ッ！」
少年が遮ろうとしても、遅かった。
マコトの手は彼のファスナーを下ろし、その途端、今の今まで窮屈に封印されていた肉剣が、唸りをあげて飛び出し、外気に全容を晒していた。
「……す、つご……ゴクッ」
生唾を飲み干し、マコトは少年の矮躯にはおよそ不釣り合いな、非常識なまでにバカでかい男性器を凝視していた。
これまでに交わってきたどの人間男性とも比較にならない。

「あ……う、わぁ……」
マコトの両手を使ってようやく握り込むことの出来そうな幹には、青黒い血管が何本も無数に浮き上がり、不気味に脈動していた。
半分程皮をかぶったままの亀頭もまた尋常ではないサイズで、その先端には少年の口程もありそうな鈴口がパックリと口を開き、パクパクと苦しげに開閉してはドロドロのカウパーを垂れ流している。
(コレが……獣人の、おちんちん……獣の、ちんぽ……)
周囲に倒れ込んだままの同僚達がどうしてこの少年を差別し、除け者にして乱交に加えようとしなかったのか、マコトは解った気がした。
比較にならないからだ。
転がっている同僚の中で一番大きかった肉棒でさえ、二〇センチは無かった。なのに少年のソレは、軽く二回り以上は大きい。計るのにも定規よりメジャーを用意した方が良さそうなくらいだ。男性の心理としては、おそらく看過しかねる事実だったのだろう。
「しょ、少尉……あの、ボク……」
凶悪なまでに逞しい剛獣棒の巨容に反し、不安げに震えている少年はあくまで小さかった。そのギャップがマコトの胸に灯った火を一層激しく燃え滾らせる。
「……うん。スゴイよ、キミの、コレ……おちんちん……他の人達なんかよりもずっと立派だから、そんな顔しないで、自信持ちなよ。ね？」
ニッコリと笑いかけながら、マコトは巨大な肉竿に両手を添えてゆっくりと扱き始めた。そうしているだけで下腹部の疼きが強まっていく。
「う、うぁっ、少尉……そんなっ、……はっ、アンッ！」
「アハッ♥　おちんちん、ドクンドクンってすっごい……もしかして、まだ大きくなるの？　こんなの、見たこと無いよ……」
浮き出た血管に沿って指を這わせ、裏筋の部分を人差し指でくすぐるように刺激する。そのたび漏れ出す少年の甘い喘ぎにマコトは恍惚と唇を歪めた。
「先汁、ヌチャヌチャって……普通のザーメンなんかよりよっぽど濃いね……これだけでも妊娠しちゃいそ……それに、匂いも強くて……くっさいおちんぽの匂い、嗅いでるだけでアタシ、トロトロになっちゃうよ……♥」
「あっ、ふぅ……そ、んな……ぁ」
ニチャニチャと指で先汁をこね合わせ、わざわざ少年に見せびらかし羞恥を煽りながら、マコトはそろそろ次のステージへと進むべく彼の腰に腕を回して手繰り寄せた。必然、隆々といきり勃つ肉剛直はマコトのたわわな胸の谷間にすっぽりと収まる形となる。
「こんなに大きいと、咥えたらアゴ外れちゃうもん、ね。……はぁ♥　アタシの自慢のおっぱいでも、挟みきれない……ンッ♥　あっ♥　ちょっと、おチンポそんなに暴れさせちゃダメだよ……んぁあっ♥」
「すっ、すいませ……うわっ、あぁあ……！」
「ん、ふぅ……ちょっとはみ出しちゃってるけど、これなら……なんとか。……フフ、どう、かな？　アタシの爆乳膣、キモチ良い？」
「あっ、わっ……うっ、あぁあぁっ」
快感に打ち震えるその反応が答えを雄弁に物語っていた。
圧倒的なボリュームを誇るマコトの乳房でさえ挟みきれない少年の獣肉柱が、柔肉をグイグイと内側から圧迫し、押し退けて、性交に適した肉膣へと形を変えさせていく。
「熱い……キミのおちんちん、熱すぎだよぉ……♥　あっ、くひぅっ♥　人間のおチンポと全然違うの……キミ、童貞だよね？　こんな、皮かぶって、恥垢もチーズみたいにこってりたっぷり……くっさい、童貞チンチン……♥」
「しょ、少尉い……、少尉の、ナナヤ少尉のおっぱい……大きくて、柔らかくて、ああっ！　ボクのおちんちん、少尉のおっぱいに食べられちゃっますぅ……！」
「うん、そうだよぉ……キミの包茎童貞チンチン、アタシの爆乳膣で今筆下ろしてるの……あはぁっ♥　おっぱいで筆下ろしとか、普通、無いからね？　こんなコト……あぁあンッ♥　もぉ、先汁でおっぱいドロドロ……乳肉射精されたみたいになっちゃってる……ホントに、とんでもないおチンポだよぉ♥」
左右からグイグイと乳肉を押して谷間膣内の圧力を上げつつ、マコトは自分が少年の肉棒を弄びながらその実すっかり虜にされつつあることを自覚していた。
ただの人間とは比較にならない獣人の肉棒。先汁でさえこの濃度、匂い、量だというのに、これが本格的な射精ともなったらどうなってしまうのだろう。
(プリップリの、ゼリーみたいなおチンポ汁……凄く熱くて、臭くて、息もつまりそうなの流し込まれて……やだっ、想像しただけで……イキそうになっちゃう……このコのおチンポ汁、欲しい……欲しいよぉ♥　ドロドロのマグマザーメンでおっぱい満かされて、もっとキモチ良くなりたい……あぁ♥)
「ねぇ、キモチ良い？　アタシの胸、キミのデカチンポでじゅぼじゅぼえぐられちゃってるおっぱいマンコ、キモチ良い？」

「あっ、う、……しょ、しょういのお、おっぱい……あっ、あああ……！」
「アタシはキモチ良いよお♥　ちんぽでおっぱい肉ほじられるのすっごいキモチ良いの、おっぱいオナホみたいにされるのヤバイくらいキモチ良いいあひいいいいいッ♥　もうっ、もおアタシのおっぱい、チンポ穴ぁ♥　キミのチンポ専用の、チンポハメ肉にされちゃってるよお♥　もっと、もっとおっぱい突いて極太勃起チンポで突き上げてえッ♥　ドエロチンポでおっぱい孕ませるつもりで突いていいからっ、アタシおっぱいで妊娠しちゃうからぁ♥」
　いつの間にか、少年もマコトにたどされるだけでなく自分から腰を振り始めていた。最初は控え目に、それがどんどん速度を増すにつれマコトの快感も強く、深く、エスカレートしていく。
　元々胸は性感帯だったものの、今感じている快感はかつてマコトが味わったどんなものも凌駕していた。このまま射精されたなら、冗談で無く本当に胸で妊娠させられてしまうのではないかなどと思ってしまう。
(でも、でも仕方ないよ……このコのチンポなら、きっとおっぱいでも妊娠出来ちゃうよ……アタシ、おっぱいでセックスしてママになっちゃうよお♥)
「あっ♥　あっ、んぁあああああああっ♥　カリい♥　チンポカリが乳輪っ、乳首も擦ってる擦ってるぅう♥　これダメッ、きっ、キモチ良すぎてアタシバカになるっ、バカにされひゃぅうぉおおおおおっ!?　おっ♥　ンおほおおおおおおおおおおおお～～～～～～～～～～～ッ♥」
　あまりに激しい抽挿によって乳肉がありえないくらいに形を変えていく。肉棒が抜き差しされるたびに歪み、ひしゃげ、押し込まれて、カリ首や血管に乳輪や乳首を擦り下ろされたマコトは気が触れたように嬌叫をあげた。
「少尉！　少尉、ボク！　ボク、ああっ、へ、変です……なにか変で……おちんちん、迫り上がって……なにこれっ、なんかくるっ、くるぅう!!」
「うっ、ウソッ、キミもしかして精通もまだ――ふぉおおおおっ!?　まっ、まだ大きくなるっ、チンポ膨れて……おおおおっ♥　しゅごっ、ちんぽまだまだ大きくなって、おっ、おっぱい壊れりゅっ、壊されひゃぅぅうううう♥　エロチンポでおっぱい壊されりゅぉおおおおっ♥」
　まさか精通すらまだとは――その事に驚くマコトの乳膣内で、射精に向けてさらに膨張した巨肉棒は精管を上昇してくる雄汁の脈動をダイレクトに伝えていた。火山の噴火や洪水といった天災すら彷彿とさせる、爆発的なエネルギーがマコトの胸の中で、爆ぜる。
「うわぁああっ、でるっ、なにかでちゃうよおおっ!!」
「はぅうっ、あっ、んぁあおおおおおおおおおおおおおおおおっ♥」
　凄まじい勢いで乳肉を打ち、さらに顔や髪にまで飛散した精液に塗まれて、マコトは容易く絶頂を迎えさせられていた。
　あまりに濃厚で濃密な、性の匂い。
　これが初の精通であるはずなのに、少年の獣精はあまりにも熱く、蛇口の壊れた水道のように止め処なく吐精を続けていた。
「へぎいいいっ♥　にゃっ、おおおおお♥　とまんなっ、とまんないっ♥　チンポ汁シャワーすごっ、すごすぎるよおんひぁあああああっ♥」
「こっ、これが射精……ボク、ボク射精して……ナナヤ少尉のおっきくて柔らかくて、温かいおっぱいに射精しちゃってるっ！　止まらないっ、射精止まらないよおおうぁあっ！」
　犬型の獣人であるためか、少年の射精は呆れるくらい長かった。
　人間と犬の特性を併せ持つ陰茎の根本は膨れ上がって乳肉を圧迫し、先端の尿道口へと絶え間なく精液を送り続けている。マコトの胸も顔も、上半身全て白濁とした獣汁によって染め抜かれてしまっていた。
「んぶっ、お、……ぶぇえ……♥　あふっ、チンポ汁ぅ……くっさい、チンポ汁ぅたくさぁん♥　……んじゅ、じゅるる……ん、ぶぁあぁ♥　こ、れぇ……舐め取ると、喉に引っかかって……ぐぶっ♥　こってり濃厚チンポ汁で、アタシ窒息しそうに、……んぁあああああっ♥　死んじゃう……チンポ汁で死んじゃうぅ♥」
「あ、ああ……まだ、出る……すっ、すいません……少尉、……ボク、これ、止まらない……あっ、ああ……っ！」
　止まらないどころか、少年の射精は益々勢いを増しているかのようにマコトには感じられた。肉棒もさらに硬く、熱く滾っている。
「おっぱい、おっぱい孕む……孕んじゃうよお……んぁあっ♥　こ、こんな濃いおチンポザーメン、アタシ、初めて……これ、もう絶対、匂いとれない……キミの匂い、おっぱいに染み込んじゃってるよ、ね？　……んふ、あはぁ♥　チンポマーキング、臭ぁい……えっちなちんぽ汁、臭いよお……♥」
　付着した精液を手で乳房に塗りたくり陶然と歓喜に打ち震えながら、マコトの眼は淫欲に狂った色で少年の肉剣を見つめ続けていた。
(クチの中も、おっぱいも……獣臭いエロチンポ汁でいっぱいにされちゃった……明日はノエルとツバキと一緒に出かける約束あるのに……絶対、匂いとれないよ……二人に、アタシ

がスケベ雌だってバレちゃうよ……でも、……でもぉ♥）

眼前に降々剛々とそびえ勃つソレはまさしく肉の凶器で、上半身で存分堪能した今、マコトの子宮は次は自分の番だと言いたげに強烈に疼いていた。

こんな状態で、挿入せずに終わってしまったら……間違いなく狂う。欲求不満だとか不完全燃焼だとかそんな些末な問題ではなく、生物としての本能が瓦解して気が触れるという確信があった。

「……ねぇ。……いい、よね？」

「えっ、あ……」

信じられないことに、まだ断続的に射精を続けている肉棒に手を添え、愛おしげに擦りながらマコトは訊ねた。甘い声音ながら、有無を言わさぬ勢いで。

「キミの……おチンポ……今度は、下のオマンコで筆下ろし……今日、二度目の筆下ろししちゃっても、いい……よね？　……ん、あっ♥」

少年の口が答えを述べるよりも先に、陰茎がビクンと跳ねて応えていた。

猛っている。

こんなにも可愛らしい、女の子のような少年なのに。雌肉の中に収まりたくて、雄々しく猛っているのだ。

「んふ……っ♥　可愛い……キミ、ホントに……はむっ♥　チュッ♥」

真っ赤になって俯く少年の頬に手を添え、軽く啄むようにキスしながら、マコトは彼をその場に優しく押し倒した。

天を衝くかのような怒張が、マグマを噴き上げながら今か今かと交接を待ち望んでいる。その迫力に目眩すら覚え、マコトは少年の腰の上に跨って最終的な位置を調整した。

「あぁ……ビクンビクンって、おチンポ……怒ってるみたいに、脈打ってる……こうして先ッポが触れてるだけで……シッ、ひぁっ♥　……ダ、ダメ……力、抜けちゃって……も、もぉ……挿入れちゃう、……ちんぽ、喰べちゃう……っ♥」

濡れそぼり、ぱっくりと開いた秘裂を二度、三度桿亀頭に擦り合わせてから、マコトはこれ以上は我慢出来ないとばかりに一息に腰を落とした。

瞬間――眼の奥で、火花が散った。

「～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ッ⁉」

一気に挿入することが出来たのは、偏にマコトの肉体が持つ獣人としての頑健さのおかげだろう。これが人間の女性だったなら、膣が裂けて大怪我をしていたかも知れない。

それ程までの壮絶なサイズだった。

「あがっ、お、……ぐ、ほぉおおお……～～～～っ」

（な、に……コレ……お、なぁ……か……ぜん、ぶ……おっ、おしあげ、られて……うっ、く……クチから、でちゃ、う……ない、ぞう……ぜんぶ、お、ぐ……ぶぶっ、お、おぉおおおおお……）

子宮の最奥まで貫いたそれはそのまま腸も胃も肺も全てを押し上げ、潰そうとでもするかのようで、マコトは肺の中が空っぽになるまで息を吐き出してから恐る恐る下半身へと視線を向けた。

「お、ぐ……か、は……ぁ……あっ、……いぎ、……お、あぉお……？」

我が目を疑った。

ボッコリと、中に丸太でも突っ込まれたかのようにマコトの腹は盛り上がっていた。無論それは丸太でも何でもなく、少年の規格外の肉棒だ。

（うそ……あ、アタシのお腹……こんな、膨れ……し、しかもアレ……まだ、三分の二くらいしか……挿入ってないんじゃ……ないのぉ……っ⁉）

カッと見開かれた眼から、ボロボロと涙が伝い落ちた。

信じられない光景を目の当たりにして、今さらのように恐怖で背筋が震えた。

もしアレを根本まで全て挿入されたら、今度こそ本当に自分は死んでしまうかも知れない。死なないまでも、女としての機能は完全に破壊されてしまうかも知れない。生命の危機に瀕しそれが素直に怖いのに――

（でも、でも……コレ……コレ……ぇ♥）

キモチが、良いのだ。

自分の中の虚ろを隙間無く完全に埋めてくれる巨大な肉棒があまりにも心地良くて、怖気が走った。

「あ、ひ……ぇ……ひぐっ、……い、ぐいいいい……っ♥」

口内で分泌された唾液が、だらしなく開きっぱなしになっていた口端からダラダラと垂れ流され、マコト自身の胸や真下にある少年の下腹部を汚していた。

涙も同様に。

「へぎっ、ぐぅううう♥……ひんほっ、……おぉ♥……ひんふぉおおお♥」

肉体は確実に悲鳴をあげているのに、頭がオカシクなりそうなくらい、今のこの状態が、キモチ良い。快楽中枢は破壊的な刺激を受けて壊滅寸前、残されていた理性など木っ端微塵に吹き飛んでしまった。

（コレ……ケダモノのぉ♥　……獣の、セックスぅ……♥　知性なんて、欠片も残さない……チンポと、マンコだけぇ♥　キモチ、良いの……キモチ良いのぉお♥）

「しょ、少尉……あっ、う、うぅ……ッ！」

　挿入してからずっと動きたいのを我慢していたのだろう。辛そうな顔で切なそうな悲鳴をあげている少年に、マコトは慈母のように微笑みかけた。

「いっ、イイ……からぁ……っ♥　……好きな、ようにぃ、ひぐぃ……ッ！　う、動いてぇ……チンポッ、お、おぉおひんぽぉちゅき上げて、イイからっ、イイからぁあっ!!　ア、アタッ、アタヒを、こわ、してぇ♥　……おね、がぁい、全部、ブチこわひてぇえっ♥」

　少年の理性による抑止も、ついに限界を超えたのだろう。

「あぎぃいいいがぁああああああああああああああああぁあッッ♥」

　真下から、削岩機のような一撃。

　極悪なまでに張り出したカリ首が肉襞を刮ぎ、握り拳のような亀頭が子宮奥壁を全力で殴りつけてくる。

「おごっ！　おおおおおんぎゅひぃいいいいいいいいいいいいいッ♥」

　人間の悲鳴ではなかった。

　マコトの中で、ヒトとして生きる上で大切なあらゆるモノが〃切れて〃いた。

　理知の全てが灰燼と帰し、原始の野生が、本能だけの獣が、ひたすら、ただひたすら肉と肉の快楽のみを求めて律動する。

「いぐぅううううっ♥　ぢんぽっ、ぢんぽぉおおいひぃいいいいいはぐぅうううううおぉおおんほぉおおおおおおおおおおおっ♥」

　明朗快活でボーイッシュな少女の面影は最早そこに無く、無様で、醜く、快感を貪るだけの雌の貌は、それでもなお淫靡な美しさを魅せていた。

「うぅううあぁあああああ!!　ナナヤ少尉ッ、少尉のナカッ、スゴイ、スゴイですぅうううんきぃああああああああぁあッ!!」

　少年も必死だった。

　まだ根本まで完全に挿入しきれてはいないものの、ギチギチに肉棒を締めあげる秘壺の感触は想像を絶するものであり、女を知らなかった少年からあらゆる快感を強引に引きずり出そうとでもしているかのようだった。

「へぐぅおおおおおおおおッ♥　もっと、もっろぉおチンポッチンポチンポチンポチンポおおおチンポしてぇええええチンポつっこんでぇえええぎひぃいいいいいいいいいッ♥」

「はいっ！　はい、はいいいいいいっ!!」

　少年の小さくか細い身体がマコトの豊艶な身体を何度も何度も突き上げ、そのたびに爆乳が千切れそうなくらい揺れた。その肉果実があまりに魅力的すぎて、少年の手がそこに伸びる。

「えひゃぁあああぁぁあああっ!?　おっぱい、おっぱいもぉおおお揉んで揉んでぇええええもっと揉んでぇええええアタシの爆乳揉み犯してぇえええええええッ♥」

「やぁらかいよぉナナヤ少尉のおっぱい柔らかすぎるよぉおおおんぁあああああ!!」

　掌に収まりきらず溢れ出た乳肉が淫猥にひしゃげた。どんなに柔らかいとは言え、ヒトの身体の部位がこんなにも変幻自在に形を変えるものなのか、少年も、マコト自身も信じられなかった。

　つまりもう、ヒトでないのかも知れなかった。

　人間どころか獣人ですらなく、原始の獣のようにまぐわい合うだけの二人なのだから、そこに常識など当て嵌められるわけが無い。

「ぁあああぁあっ！　少尉ッ、少尉、ボクもう！　またっ、また出ちゃう、出ちゃいますぅうううう!!」

「いひよぉおお♥　チンポ汁ぅ♥　ザーメン、スペルマ、雄汁、孕ませ汁ぅ♥　なんでもイイから何度でもイイから射精して射精してブチまけてぇええッ♥　アタシのナカにもチンポ汁染み込ませてアタシのことキミのチンポ専用のチンポ雌にしてぇええええええッ♥　はひぃいいいいいいいい〜〜〜〜〜〜ッ♥」

　許しを得た瞬間、少年はついに不可能かと思われた根本までの完全挿入を試み、マコトの腰を掴むと全身全霊を込めて獣剛直を突き上げた。

「イッ!?　かッ、あ……は、は……ぁああ――〜〜〜〜〜〜〜〜ヒぐぅううううううううぉおおおおおおおおおおおおおおおおおンふぉおおおおぐひぃいいいいいイイイイイイイイイイイッッ♥」

　壊された。

　何一つ残らないくらい。

　完膚無きまでに、マコトは少年の肉兵器によって、破壊されてしまった。

「はっ、はっ……あっ、ぐっ……かふっ、おっ……ぉおおおおお……♥」

　根本まで、剛直は完全に埋まっていた。隙間無く、ピッチリと。

　少年はマコトの腰をがっしりと掴んだまま、放さない。放すことなく、呻き声を上げ、ビクビクと腰を震わせた。

「ひやぐっ!?　いっ、〈ぎいいいいいいっ!?」
(うぁああああああッ♥　射精てるっ、もう隙間なんて無いのに、アタシの子宮に空きスペースなんて全然残ってないのにッ♥　子宮全部亀頭で埋めてるくせにチンポ汁射精してるっ、このコ遠慮なんて全然してない、全然してないよおおおおんぁあああああああああッ♥)
「おっ、おぶっ、ぶほっ♥　んほおおおおおおおおおおお……♥」
妊婦のように膨らんでいく己の腹を見下ろしながら、マコトは頬を引き攣らせていた。笑みが、笑みになりきらない。
膣内と子宮どころか、全身の血管という血管に少年の精液を流し込まれて身体中にそれが循環していくかのような、とてつもない感覚だった。
澄み渡った意識が白濁に塗り潰され、何度も何度も覚醒と途絶とを繰り返し、ブピュッ、ブリュッと汚らしい音を立てて接合部から漏れ出ていく精液すら勿体なくて自らの股間に手を伸ばし、指で精液を掬い取ったマコトはそれを丹念に舐めとった。
「んちゅっ、ん、……んむぅ♥　……んぢゅる、……ん、ぢゅぷぁ♥　はぶ、うぅ、おいしぃ♥　おいひい、おいひいよほぉ……♥」
口の中で飽きることなく咀嚼したソレをやがて嚥下し、また溢れている精液を掬い取っては、舐める。
一滴たりとも無駄にしたくない、全て自分の中に摂り入れたい——今のマコトを衝き動かしているのは、そんな欲求だった。
「あ……は……あぁ♥」
「……少尉ぃ」
か弱げな声とは打って変わって、少年の肉棒はまだまだ萎える気配など無くマコトの中で猛々しく勃起したまま吐精を続けていた。その無尽蔵とも言える絶倫な精力が愛おしくて、マコトは再び腰を動かし始めた。
「うっ、ナ、ナナヤ少尉……ひやっ」
「ン、フフ……あは、はぁ♥　……もっと、ね？　……もっと、シよ？　アタシ、このままずっとキミと繋がってたいよ……ふ、ンンッ♥」
「ボ、ボクも……ずっと、少尉と……ふわぁっ」
悦嬌の極みだった。
このままもし死ぬまで彼と繋がっていられたら、それはなんてステキなことなのだろう。……と、そこまで考えてマコトはまだ少年の名前すら知らないことを思い出した。

「あっ……そうだ……キミ……」
「……なん、ですか？」
訊ねようとして——やはり、やめた。
「ううん、……何でも、無いよ♥」
名前とは、理知有るヒトにこそ必要なものだ。ただ快楽を貪るだけの獣と化した自分達には今さら不要だ。そう考え直し、マコトは律動を早めた。
「ふっ、あっ♥　あひっ、ぅううんはぁあああああ♥」
意識が、白に染まる。
もう何も考えられない。考えたくもない。
あらゆる束縛、しがらみから解き放たれて——今、マコトは悦びの園にいた。

お誘いいただき感謝の極みです。
ハザマの動向探ってたら見つかって
蛇使った性的なオシオキうんぬんな
シチュを描いてたはずなんですが
気がついたらただの触手陵辱に。
マコトは下乳腹筋臍獣人と
己のフェチズムを凝縮したかのような
大変けしからん娘っこでどでも楽しんで
描けました。改めて感謝感謝です。
「JUNK×JUNK」kojouでしたー。
(http://yumenoshima.bake-neko.net/)
んっぶっ…
ブルンッ
うぐぅぅ!!

獸華
繚乱
寒天示現流